

ワークショップ 14

「小腸腫瘍の診療の実際：診断から内視鏡治療、手術治療、化学療法まで」

司会 山本 博徳（自治医科大学内科学講座消化器内科学部門）
八尾 隆史（順天堂大学医学部人体病理病態学講座）

カプセル内視鏡、バルーン内視鏡などの内視鏡技術、低侵襲手術の進歩・普及、正確な病理診断に合わせた化学療法の選択などにより従来診断・治療が困難であった小腸腫瘍の診療が大きく変わった。比較的早期の段階で診断が可能となり、低侵襲治療、予後の改善が得られている。Peutz-Jeghers 症候群の内視鏡的マネジメント、小腸リンパ腫の内視鏡診断から化学療法などがその例である。良性、悪性を含めた小腸腫瘍の診療に関する演題を募集する。